2022 年 11 月号
Community & Friend
有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎
過去の月間通信は https://www.alphar-net.com/monthlymail.htm

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 11 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

著者の中国シリーズと呼ばれる連作は、『蒼穹の昴』『中原の虹』『マンチュリアンレポート』と、他にも『珍妃の井戸』などと、それに続くこの『天子蒙塵』とある。『我が勲は民の平安』を標榜し、張作霖たち馬賊が万里の長城を越え、北京に向かう物語が『中原の虹』だった。

この張作霖なる名前は小学校の歴史の授業に出て来た時から、倅の張学良の名前と共に、妙に頭に響き、何故か頭から離れなかった。教科書ではどういう紹介だったのかまったく記憶していないが、司馬遼太郎の竜馬のように多分に脚色されているとは思うものの、少し違うところは著者の作為が充分に盛り込まれている点が面白い。

『執政閣下にお答えいたします』とは、満州国建国を張作霖爆殺を皮切りに関東軍の暴走として捉え、石原莞爾等の人事を一新した関東軍司令官兼駐満大使兼関東軍長官武:藤信義将軍の言葉だが、興味深いのは続く次のセリフ。

『人の世は、礼が廃れたのち法が生まれました』

『明文化された法などは、人間の堕落の証にすぎませぬ』

『よって本官は、文書なき口約束なればこそ、礼に鑑みて守ります』

にある。執政閣下とは愛新覚羅溥儀のことである。こんなセリフに面白味を感じるのには理由がある。

何故、縄文の民は文字を持たなかったのか？

という推察である。

小学校から教え込まれた世界四大文明なんても、近年、中華の民に依って打ち出されたらしいが、これが世界で文明の発祥だなんて、きょうび信じている人も少なくなって来たのではないかと思う。それは人文科学や考古学によって最近急速に明らかになって来ている事実があるからだが、どうもこの地の北関東・東北・北海道南部を中心とした、縄文期の高度な社会を１万年もの間営んで来た事実の解明が進んで来ている。

言語学なるものには詳しくないが、文字の発達は約束事の客観化に依るものではないかと想像している。つまり契約社会だが、裏を返せば約束を守らない輩がいたという事になる。『武士に二言は無い』とも云うし、『出来ぬ約束をするものではない』ともいう。そう考えれば、約束とは慎重に交わすものだし、一旦自分の口から出せばそれは客観的事実となり、それは覆水が盆に返らぬように客観的とは言いながら自分の中に色濃く残る。

世界のひとは、文字が文明の証と言い、文字を持たぬは野卑だという。果たしてそうだろうか。文字に残さなければ、約束を違える事を前提としている方が、余程野蛮である、と思う。この辺りに １ 万年も続いた相互

扶助の精神を柱とする安定した暮らしのヒントがあるのかも知れない。つまり、縄文期の人々は文字が無かったのではなく、然程必要としなかったのかも知れない。必要は発明の母と云うが、それが common sense であれば、そもそも作る発想が無かったと思うと、変に合点がいく。

世界史の謎となっている、突然現れて、忽然と消えたシュメールの民こそ、世界に散った縄文人だと自分はずっと考えている。シュメールの民は、ペトログラフ、或いはペトロクリフという文字を持っていて、それは約束を守らぬ時の盾にする為ではなく、後の人が其処からスタート出来る伝達のためで、これこそが人間が思考を積み重ね、発展していくための時間の節約となり、それが文化となる。

シュメールは、もちろん楔型文字を持っている。ところがこの楔型文字は、実は日本でも多く見つかっている。

歴史に登場していないだけだ。むしろ、その原型という文字がある。何故原型かと思うかは、逆に中近東で発見された楔形文字の文法に従うと、ほとんどが解読できる文字がこの列島に残っている事実があるからだし、従って、中近東辺りで発見される楔形文字の方が、年代が新しいような気がする。

また、技術すら新しいと思える。別に古さを競っている訳ではないのだが、何故こうも世界は無駄であるだけではなく、つまらない事ばかり起こしているのかと思うと、もっと気の効いた考えのもとに暮らせば、これだけ Zoom でそれぞれが自分の場所にいながらにして、商談が出来るほど科学が発達しても、もう少し意味や意義のある動きの中で馬鹿になっていられるのではないかと思ってしまう。

きっと、先に書いた地域に、其処には居られないほどの、天変地異が起こったのだろうと想像している。その地域は今の様に、雪も積もらなくて温暖な気候だったのだろうと思っている。縄文人が海洋技術を持っていたのは、その遠洋でしか捕獲出来ない魚の骨が出ている事から明らかだから、そのタイミングで中東地域のみならず南米アンデス地域に黒潮に乗って渡った一群もいただろうと想像している。それは、中学の時に市民会館に学校行事で『十戒』という映画を見に行った時に知った。『東方に理想の国家がある』と言い、ノアの方舟に乗り込む、別に方舟に乗らずとも、アッシリアに滅亡された南北ユダ王国の民は、一斉に東の理想国家の存在情報を基に目指して移動した。

その言葉は、子供だったことも手伝って予言という名の、第六感という事で片づけていたが、モノゴコロついて来ると、それは否定しないけれど、まるで見て来たように聞こえたので、これはちゃんとした伝承の事実だと思うようになった。つまり、この地にかつて日本列島で暮らした事のある民が、かなりのインパクトを以って融合した事実があるのではと考えている。つまりそれがシュメール人だと考えている訳だ。

小豆島に Wi-Fi、が無かった頃、よく夜空を眺めていた。冬至の太陽がオリオンの三ツ星の延長線上から昇って来て、これがすべての宗教の原点になっていると知ったのも、この頃だ。ひとはただ、太陽の恩恵を受けて生きている事に気づくのは当然で、そうすれば、自然と東へ、東へと日の出を辿り、極東のこの地に着いたことは想像に易しい。そこが劣悪な環境であれば通過しただろうが、仮に神がいなくてもそこは至福の楽園だっただろう。

未だ書きたい事がてんこ盛りだが、紙面が尽きた。

いずれ、人は必ず正しい方向に流れていくように、歴史も正しく明らかになって行く。身びいきで言っている訳ではない。たまたま、この列島に生まれ育ち、そこで暮らし、身近にそれを感じるから、感じるままに思考しているだけで、これが、妄想でも、それはそれでいい。自分には、そう聴こえるし、そう観得るし、そう感じられるだけだ。

口約束で充分だという暮らしの中で、自分は生きていたい。

有限会社アルファー：吉田清一郎